

□ Wardle P. : *Vegetation of New Zealand* 672pp. 1991. Cambridge University Press, Cambridge. 約¥38,000.

国土面積が約27万km²と日本や英国のそれに近いニュージーランドは、南緯33°から53°を占め、緯度では日本よりも極側に寄るため、南島では大規模な氷河が発達している。山の標高（最も高いMt. Cookは3,764m）や火山、脊梁山地の存在による気候の地域差など、環境面でも日本と比較できる点が多い。日本が南北に長く環境も複雑で植生が多様であるのと同様な多様さがここにも存在する。ニュージーランドは日本からは遠い国だが、日本と全く別な植物区系に属する異質な植物相が植生上どのような違いを生むのか、評者は興味深く思った。

本書は直訳すれば「ニュージーランドの植生」だが、単なる植生記載ではなく、植物の生きざまについてのモノグラフといった方が内容を適切に表現している。全体は、1) 自然ならび生物的環境；2) 植物相と植生の起源と変遷史；3) 生育地と生活形；4) 繁殖法、芽ばえ、寿命；5) 植生の記載・命名・分類、および環境と生態的諸過程；6) 植物区；7) 森林；8) 低木（ブッシュ）、ヒース、低木林およびシダ地；9) 草地；10) 湿地植生；11) 土壌が未発達な地面と消失した土地の疎生あるいはパッチ状植生；12) 高山帯；13) 属島（の植物相と植生）；14) バイオマス、生長、栄養、耐性；15) 遷移、退行遷移、侵入；16) 自然林の破壊・更新・動向、の16章からなる。各章ごとに挿入された総計300を超す写真と図表が記述の理解を助ける。多くの図表は他地域でも同様に作成されたものが多く、比較に便利である。

著者 Peter Wardle は、ニュージーランドでは最大級の生物系研究機関がある、Department of Science and Industrial Research の Land Resources Division に席を置く研究者である。1970年代から各地の植生や様々な種の生態について25篇あまりの論文を専門誌に発表している。

本書を通読した印象を2つほど紹介したい。そのひとつは先に述べた評者の期待に関係するのだが、系統を異にする植物が景観の類似した植生を構成する事実と異系統植物によるみごとな生態的

適応形態が並行的に存在することへの驚きである。ゴマノハグサ科は北半球でも多様化した科といえるが、ニュージーランドではクッション植物ともなっている。日本やヒマラヤならヒダカミネヤナギなどヤナギ科の匍匐性矮性低木が生えるところにスマレ科やトベラ科の匍匐性矮性低木が見られる。群落組成表をみると日本でも馴染みの属が数多く登場する。高山帯ではグローバルな分布をする属が多いのは既知のことだが、組成表として提供されてみると理解はさらに深まる。

他の印象は、本書が対象を自然植生に限っていることへの疑問である。よく知られているようにニュージーランドに入植した英国人は本国と似たこの地を本国から移入した植物や動物をもって本国にいる気分に浸ろうとした。日本並みとはいえず島であり、近接のオーストラリアからは1,600kmも離れている。こうして移入された動植物が時に不調和な生態系を生み、本来の自然に多大な影響を及ぼしたことはいうまでもない。現にニュージーランドを訪れた人は、いたるところで流れに沿って茂るヤナギ、山の斜面に広がるハンノキ属植物など数多くのヨーロッパ産植物に出会うであろう。ニュージーランドは世界有数の農業国であり、畑や牧羊や牧牛のための草地が大面積を占める。ここでも北半球で馴染みの種は多い。こうした植物がつくる植生について、本書で何も語られていないのは片手落ちである。日本でも「日本の植生」なる本を編むとすれば、自然植生だけに限定しようとする見解も当然あるし、現にこの視点で編まれた著作もある。ニュージーランドは自然植生が比較的よく保たれ、日本のように自然植生が痕跡的に残っているに過ぎないわけではないが、それでも現実を直視する必要はいずれでも変わりがないと評者は考えるのだが。 (大場秀章)

□ Lyte C. : *Frank Kingdon-Ward : The last of the great plant hunters* 218 pp. 1989. John Murray Ltd., London.

著者の Charles Lyte は長らくジャーナリストとして活躍してきたが、1980年にロンドンの David & Charles から Sir Joseph Banks を出版以来、自然史関係、園芸関係の著述に健筆をふるっ